

曾我兄弟（松口月城）

富士の山風 雨を交えて 吹く

上天 此の夕べ 二児を 憐れむ

篝火の影は 淡し 裾野の陣

警柝 響きは 遠ざかる 狩屋の帷

十有八年 朝又暮

憤恨 涙を 呑む 知る者 誰ぞ

枕を蹴つて 喚び起こす 仇 祐経

白刃 一閃 思いを 晴らすの 時

雨 止み 風 収まりて 雲 月を 吐く

凄壯 照らし 出だす 兄弟の 姿

解説 曾我五郎、十郎が父の仇討ちを決行した事を詩に託した。

語釈 ※曾我兄弟 伊豆国の河津祐泰の子。父が殺され、のちに母が曾我祐信に再嫁したため曾我姓を称した。父の仇「工藤祐経」を討つ機会をうかがっていた二人は、源頼朝の狩獵旅行に随行した祐経を富士山麓の野営地に夜襲して殺した。※富士 富士山麓。※上天 天。天上。※篝火 屋外で照明用に燃やす火。※裾野 緩斜面の原野。

※警柝 時刻を知らせたりするために打つ拍子木。※狩屋 狩りをするための陣。※帷 周囲に巡らす垂れ幕。※憤恨 腹を立てうらむこと。

※祐経 源頼朝の家来。静御前が鶴岡八幡宮の社頭で舞ったとき、鼓を打つてこれに和した。※一閃 ものの動きのきわめてすばやいさま。※凄壯 非常にすさまじいさま。

通釈 富士山から吹き上げる風は雨を交えて吹いている。仇討ちの機会を待つ兄弟。裾野の陣は篝火の明かりも薄く、警柝の響きも遠く聞こえてくる。父を撃たれてから十八年の歳月が過ぎ、恨み、涙を呑んだ事を知る者もいない。漸く父の仇を撃つ機会が訪れ、狩屋に入り、祐経の枕を蹴つて呼び起こし、祐経に向けて刀を一閃すると、思いを晴らすことが出来た。富士の裾野は雨も風も修まり、月が皓皓と照りすぎましい兄弟の姿を写し出していた。